

千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議 令和7年度 総会・事例報告会 報告書

1 日時

令和7年6月18日（水）午後1時～午後4時

2 場所

ペリエホール RoomA

（千葉県千葉市中央区新千葉1-1-1 ペリエ千葉7階）

3 概要

（1）総会（午後1時～午後1時20分）

本会議の主催者である千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議 大石会長（（公財）かずさDNA研究所理事長）及び共催者である千葉県商工労働部 関部長からのあいさつに続き、事務局から令和6年度事業報告、令和7年度事業計画の説明を行いました。

〔大石会長〕



〔関部長〕



〔事務局説明〕



〔総会の様子〕



（２）事例報告会（午後１時３０分～午後４時）

「蛋白質大規模分析の最先端技術とその社会実装に向けて」をテーマとして３題を紹介しました。

講演 1

演題：「超高感度リン酸化シグナル解析を用いた胃がんプロテオゲノム研究－臨床に与えるインパクト－」

講師：医薬基盤・健康・栄養研究所 創薬標的プロテオミクスプロジェクト
足立 淳 氏



【発表要旨】

近年、質量分析計を用いたプロテオーム解析技術の感度・スループットの向上により、臨床検体から得られるプロテオーム情報の質・量が大幅に向上している。本講演では、採取直後に凍結した高品質な胃がん生検検体を用いたリン酸化シグナル解析手法の開発について紹介された。さらに、大規模な胃がんプロテオゲノム解析によって明らかになった胃がんの特性、また治療による特性の変化、さらに新たな治療法の開発までプロテオーム情報が臨床に与えるインパクトについて講演された。

講演 2

演題：「血液プロテオーム解析システムの開発とその診断実装に向けた取り組み」

講師：公益財団法人かずさDNA研究所

応用プロテオミクスグループ長 川島 祐介 氏



【発表要旨】

近年の質量分析計の進化により、プロテオーム解析の精度と深度は飛躍的に向上した。講師のラボでは、こうした最先端のプロテオーム解析システムを基礎研究に活用するだけでなく、次世代シーケンサーによる遺伝子解析では診断が困難な遺伝性疾患の検査や、乾燥ろ紙血を用いた数百種類の遺伝性疾患の一斉解析が可能な次世代の新生児マススクリーニング検査の実現に向けた応用にも取り組んでいる。本講演では、講師ラボが開発した血液を対象としたプロテオーム検査システムと、その実用化に向けた取り組みについて紹介された。

講演 3

演題：「非侵襲的に採取可能な「便」を用いたプロテオミクスの最先端臨床研究」

講師：北里大学医学部 一般・小児・肝胆膵外科 講師

東京大学医学部 小児外科 （届出研究員）

渡辺 栄一郎 氏



【発表要旨】

今日、少子化が急速に進行する日本社会において、小児医療に求められるものは、単なる診断や治療に留まらず、次世代を担うこどもたちの健やかな成長を守り、発達を支えることにある。日々変わりゆく小児外科医としての臨床現場において、プロテオミクスという新たな研究分野が小児医療にどのように貢献し得るか、非侵襲的に採取可能な便をターゲットとする臨床プロテオミクス研究の最前線について講演された。

(3) その他（午後４時１０分～午後４時３０分）

講師への質問や名刺交換など、活発な情報交換を行いました。

〔事例報告会の様子〕



以上